

(縁・円・援)

兵庫えんだよい



このニュースレターは、市町社協の生活支援コーディネーター、住民等が創意工夫しながら行われている生活支援、地域活動をお伝えするために発行いたします。

コロナウイルス感染拡大から2年、身近なつながり、新たな工夫！

コロナウイルス感染拡大からはや2年が過ぎようとしています。度重なる変異株の感染拡大を繰り返し、つながること、集うことをめざしてきた地域活動は、いつときは動きを止めました。でも、事態が深刻になればなるほど、地域の住民も生活支援COも工夫を重ねてきました。今回は、1月のオンライン情報交換会「兵庫えんがわナビ」で13名の生活支援COから聞き取ったコロナ禍での地域の活動を紹介します。

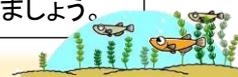
こんな時でも変わらない「人を思う」心

- ◆ コロナ禍の窮状を知り企業（段ボール製造業）が就労支援を、中華飲食店が子ども食堂に唐揚げ弁当をのべ2~3000個提供していただきました。
- ◆ 防災訓練もできないのでアルファ化米は子ども食堂や友愛訪問で配りました。
- ◆ 体操は人数制限があるため、電話で毎日「生きる？」と短い交流をすることになりました。
- ◆ サロンが出来ず、公園でラジオ体操を始めたら登下校の子どもとの交流が始まりました。



こんな時だからこそ、ワクワクしたい

- ◆ 宇宙メダカプロジェクト：宇宙飛行士向井さんが宇宙に連れて行ったためだかの子孫を飼おうと水槽を集めたり、餌やりボードを作ったり、紙芝居、歌をつくらうと地域は盛り上がっています。
- ◆ 地域に少人数での活動が増えて、そのなかでも得意なことにテーマを設定すると新たな発見がありました。
- ◆ 男性が囲碁グループをいつの間にか立ち上げておられました。



コロナ禍で生まれた福祉のIT革命

- ◆ 社協で「ZOOM講座」を開催すると孫に会いたい、オンライン結婚式に参加したい高齢者、子連れで集えない若いお母さん等に大盛況でした。
- ◆ 施設慰問ができないので「オンライン」で人形劇等を見せることにすると10か所も希望がありました。
- ◆ 高校生の「スマホカフェ」に高齢者がいっぱい！なんでも優しく教えてくれると大盛況です。
- ◆ 長年サロンを主催されている方がフードライブのために「ライン」のつながりをつくられました。
- ◆ 県社協が「えんがわナビ」や「ハイブリット研修」を始めました。

参加した生活支援COの声

- ◆ 追い込まれた時こそ住民の声を聴きました。すると、ものごとがくっきりと見えるようになりました。
- ◆ コロナ禍になってやり方を変えないといけなく、変えるときに住民と一緒に話し合ってきました。振り返ると住民もCOもすごく力をつけてきました。
- ◆ コロナがあって生活支援COの連携、協働する相手が増えました。これからはこれをどうやって技法にするかだと思います。



※他にもたくさんありましたが一部抜粋です。これからも県内の活動を教えてください。

【発行元】(令和4年2月17日発行)
〒651-0062 神戸市中央区坂口通2丁目1番1号
兵庫県社会福祉協議会 地域福祉部
TEL 078-242-4634 FAX 078-242-0297
E-Mail: chiiki-2@hyogo-wel.or.jp(担当:山下・永坂)

コロナ禍で頑張る住民を支えるために「ともに考え合う」視点を学ぶ

生活支援コーディネーター実践セミナー開催（令和3年12月7日）（会場22名・オンライン64名）

生活支援体制整備事業が始まって6年が経過しようとしています。昨年度のコロナ禍では、生活支援COだけでなく行政や他の機関の方の声を聴く機会があり、多くの方が制度の枠や立場の中で正しさを追い求め、地域の暮らしを支えることが見えない「もやもや」にぶつかっていることが見えてきました。今年度は、自分と向き合い（内省）、自分の中の枠組み「どうせ」「仕方がない」「相手がわからず屋」等に支配されていないかを見直し、小さくても誰かの力になれることを目指して学びを深めようとしています。

【講義】 「わからず屋！」との対話を続けるため

兵庫県立大学 環境人間学部 准教授 竹端 寛 氏

【実践報告】

淡路市社会福祉協議会

第1層生活支援コーディネーター

岩城 和志 氏

三木市社会福祉協議会

第2層生活支援コーディネーター

坂本 幸枝 氏

新温泉町社会福祉協議会

第2層生活支援コーディネーター

小南 かおる 氏



竹端先生の講義から

この事業は開始から数年たっていますが、なぜ、連携や協働ができないのでしょうか？もしかすると、「仕方がない」「相手がわからず屋」と思うとき、自分の言いたいことだけ言って、相手の言いたいことを聞かない「モノログ（独り言）」に陥っていませんか？地域の中の正解は多様にあります。うまくいく唯一の正解を求めていますか？本当の協働は「対話」から始まります。大事なことは、自分の考えを見直すこと、相手の話を聴くこと（水平の対話）、聞いた話を自分の中で理解すること（垂直の対話）でともに考え合うこと

勝手にしろ！



(モノログ)

こんなこと
したいんです！



(水平の対話)

(垂直の対話)

地域づくりの大先輩もモヤモヤ!?できない100の理由より、できる1の方法を考えよう

行政と社協、関係機関等の協働

ずっと行政と向き合ううちに理解者が増えてきた。2025年に向け社会の中に福祉を作りたい。この事業はもやもやをぶつけ合うことを通じて、団結し助け合うことでしか進まない。



岩城氏



小南氏

活動の見える化

見える化のためのツールで、こうすればうまくいく方法はない。自分自身で模索し、地域の活動を丁寧に伝える。関わり合う人たちが共感できるような見える化を目指す。

住民とともに進める地域づくり

協議体ができれば正解ではない。協議を重ねもやもやを繰り返しながら関わりつづけることをなくして解決はない。まずは、自分からいかに向き合うか。心合わせが力合わせ。



坂本氏

受講者の声:これから取り組みたいこと

※受講者の声の一例です。

自分が変わることが遠回りに見えて近道

人の良いところを見つけよう

自分を変えていこう

相手にわかる見える化をめざす

上司に現場を見てもらおう

会場とオンラインで県内COが熱く語り合う

○参加者は、もやもやを乗り越えるために、自分の強み、弱みは何だろうと振り返りました。

そして、もやもやは人の理解、話し合う、伝える、見える化が必要だと学びを深めました。

【編集後記】今年度の生活支援COの養成研修は「孤立」や「もやもや」に焦点を当てました。今回の実践セミナーで、「制度の枠組みだから仕方がない」、「相手がわからず屋だから」ととらわれているのは自分の意識ではないかと“はっと”しました。誰のために、何をするのか、足りないものは何か、そのために自分は何かができるか。変わらなければならないのは相手ではなく自分でした。